

新體國文學史教本

全



K220.84

13

岡井慎吾著

新體國文學史教本全

東京 晚成處藏

此書を讀まん生徒諸君に

一、文學史は、政治史が制度治亂の事實によりて國家の沿革を明らかに比して、文藝にあらはれたる現象によりて、國民性の發達をたどるものなり。即ち政治史は外面的にして、文學史は内面的なり。されば文學史を學ぶには常に政治史と參照せざるべからず、特に五年の日本歴史と。

二、芳賀博士は、その著「國民性十論」に於て、わが國民性を

一、忠君愛國

六、淡泊瀟灑

二、祖先を崇び家名を重んず

七、纖麗纖巧

三、現世的實際的

八、清淨潔白

四、草木を愛し自然を喜ぶ

九、禮節作法

五、樂天洒落

十、溫和寬恕

の十と立てられたり。本書は今之を



一、祖先を尊ぶ：忠君愛國

二、現實主義：自然を愛す：樂天洒落：勇敢敢死

の二に攝し、汎論に於ては、特にその發展變化の迹を明さんと勉めたり。

三、文學史に引例の必要な論を俟たず。但上下三千年の文例は此小冊子の收め得る所に非ざるを以て普通に讀本に載せられたるべきものは一切之を省けり。諸君幸に之を既終の讀本に求むるの勞を吝むなかれ。

四、書中年號には我國の紀元を左注し、引例中稍難き語句は卷末に略解を附せり。右肩に*を附せるものこれなり。或は諸君が自修の一助たらんか。

明治四十二年十月

著者しるす

新體國文學史教本

目次

序論

汎論

明治時代

概説

和歌

俳句

新體詩

小説

徳川時代

概説

一頁 二

一五

一七

一八

一九

二〇

二三

和歌——狂歌 狂文

二六

俳諧 俳文——川柳

二九

淨瑠璃 附、脚本

三一

雜文學

三五

小說

三九

近古時代

概說

四三

和歌

四六

連歌

四八

謠曲

四九

雜文學

五三

御伽草子

五五

平安朝時代

狂言

五六

概說

五九

和歌 今樣

六一

雜文學

六三

物語

六八

奈良朝時代

概說

七一

記紀宣命

七二

萬葉集

七三

上古時代

概說

七五

傳説
祝詞
和歌

七七
七八
七九

四

新體國文學史教本

岡井慎吾 著

序論

文學史
の用

人の思想感情が、文章の上に現れたる者を文學といふ。其思想感情は、國民毎に、各その特色あり。之を國民性といふ。我國の文學を通して、我國民性を知るは、眞正にわが國家を理解する道ならずや。

萬世一系の皇室を戴きて、溫和なる氣候、明媚なる山水の間に生息せし我國民には、先祖先を尊び、現實に満足する氣風の根柢深く、漢學佛教兩思想の同化は更にとりぐの色香を添へて、國文學も百花亂發の春を現じ、今日の聖代に及び

ては泰西思想の影響亦淺からず。
文學はその形式によりて歌謡と散文との二に分れ、歌謡は
散文に先だちて發達するを常とす。以下、先、上下三千年の大
勢を敘して國民性の發展變化せし跡を明し、次に各時代に
つきて再び詳説せんとす。

汎論

和歌の最も古きものは神代の作と稱せらる。又國家・皇室の
大事に際して神前に陳べし祝詞は、形こそ散文なれ、その節
調を主とせる點に於ては、寧ろ歌謡に近く、これも亦神武以
來の面影を存すと云はる。

此等の和歌は主に個人の抒情詩たり、又祝詞は、主として祖
先を尊び敬へる國民一般の聲なれば、體製大に異なれども、

上古

これにあらはれたる國民性

和歌の、笑み榮ゆるを朝日に寄せ、事變の起らんとするを雲
立ち亙りといひ、丈夫を「葉廣の椿」に、功臣を「日向の駒」に喩へ
たる、又祝詞の、常に「高天の原に神留ります皇親神漏岐神漏
美の命を以て」と筆を起せる所に、祖先を尊び現實を離れぬ
氣風は見れたり。

應神の朝漢學傳來し、欽明の朝佛教の輸入ありしが、其影響
は聖德太子の頃より著し。此に始めて祖先ならざる神あり、
實際の外に一種の理論あるを知りぬ。思想上の變化も亦大
なりといふべし。乃ち政治には大化の新政を見、美術には法
隆寺・東大寺の建築を見るに至り、國文學にも奈良朝といふ
一期を劃しぬ。

奈良朝

奈良朝の珍とすべきは萬葉集なり。建國の古より述べ來る
結構といひ、自然の山川にあこがるゝ題目といひ、わが國民

萬葉にあらはれたる外來思想

この時代の文學程度

平安朝

萬葉と古今

性の面影ならぬはなし。されど歌中に人倫の道を教へ、人生の無常を説くものあるに至りては、誰か亦外來思想の影響たるを疑はん。

此時代になほ古事記宣命あり。宣命は現つ御神の綸言なれば、其性質祝詞に近く、古事記の精采は傳説にありて、その莊重雄健なる文辭の、敘事詩に似たるを見れば、文學はなほ歌謠時代を去ること遠からず。

漢字傳はりて既に五百年、國民の同化力はよく兩假字を發明して、此に國字を有するに至りたれど、朝野舉りて漢詩・漢文の模倣に忙しかりしは平安朝の初期なり。

同化の力は、なほ宗教には本地垂迹説・文學には歌集勅撰となりてあらはれ、古今集はかくて延喜の聖代に出でぬ。然れども萬葉と古今との間には大なる相違あり、蓋し古今にあ

この時代の特色と國民性

りては、前期の影響を受けて、威嚴ある文學は漢詩・漢文に限る如く思はれたるより、和歌は即興的のものとなり、且剛健尙武の風、地を掃ひたれば、長大の詩形は全く亡びたる是なり。然るに此古今集は永く和歌の模範となりたれば、此等の弊の後世を毒せしこと幾何なりけん。

蓋し文弱は古今集の罪に非ず、時代の罪なり。平安朝ほど文弱なる歴史はなし。漢學に道義を學ばず、佛教に信念を追はず、浮華なる詩文・華奢なる行法に助長せらるゝものは、門閥の風成りて、宿命によりて浮沈すべき人生觀なり。此に於て彼等は情念趣味を偏重して、あはれにつきゝしき生活を理想としぬ。花笑へば鳥歌ひ、露玉を鋪けば月白金と映る、是さへも、あはれにつきゝしき、我國の自然に養はれたるならざらんや。

女流文學の影響

文弱の風尚と藤原氏の外戚政略とは、女流文學を盛ならしめぬ。そも、我國民は實際的の國民なり、況や文學の中心の女子に歸せしをや。精細なる寫實に流れて、高遠雄大なる理想の影なきも亦已むを得ざるなり。

「大宮人はいか云ふ」とも、祖先を尊ぶ風は關東に存して、地方豪族起り、藤原氏の權勢日に非なり。こゝに御堂關白の盛時を回顧せる歴史的述作出でぬ。

保元・平治の交倫常の頽廢極まる。されど社會として見れば、京師の動搖は豪族が中央における地位を認めざるを得ずして、階級制度の破壊となりて、到る處に一道の生氣動きて、道德に武士道起り、宗教に新佛教開かれ、文學には又歌風革新の聲、その反動たる歌論の旺盛を見たり。

平氏は京師に入ること早かりし爲に、却て平安貴族に感化

わが國の花とば見れば
宮人は大いかに
云ふらん阿部
宗任

新氣運

近古

文藝の二中心

せられりぬ。源氏は之に鑑みけん、府を鎌倉に開きて武斷治をなせりこゝに近古時代の幕は落ちぬ。

此時に注意すべきは、我國文藝の二中心を有するに至りしことなり。彼は京師・公卿にして保守的、此は鎌倉・武士にして進取的。京師の誇は和歌にして新古今集あり。絳景の作を多くして、古今の弊を矯めたるは一應の功名なれど、和歌の賞玩が、修辭上の工夫洗鍊に重きを置きたる爲に、技巧に趨りて本歌取りの體を開けり。鎌倉に横溢せる、名節を尙び剛健を重ずる氣象は、上にいへる歴史的述作をして全く軍記たらしめぬ。但文事に短なるを武士の本來としたるほどなれば、その歴史なく習慣なきを利用して、新局面を開拓せざりしこそ、口惜しけれ。

佛教思想

佛教思想が萬葉に見え初めしは上にいへり。平安朝に入り

想

平安朝
との比
較

て、朝野の倭佛その極に達したれど、國民固有の現實主義は之をしも現世利益の一邊に考へて、徒に醫療息災の目的に供したり。然るに此時代に於ては、人倫上・社會上悲風慘雨累りに至りて、流石に人生を悲觀せざるべからず。此時之が慰藉たるものは一の宗教あるのみなれば、新佛教は始めて國民の根本思想を動かして、此時代の文學に宗教的臭味を帶びしめぬ。

南北朝合一して文藝亦一元となり、世は小康となるや、謠曲・狂言・連歌等出でぬ。此等に注意すべきは、謠曲には親子は二世・主従は三世といふ、極めて制限せられたる愛國尊祖の情熱の發露、かく親子は二世といひながら、平安朝の述作の男女の中らひを主とせるに比して、中々に親子の情を敘したる材料の多き、狂言が樂天洒落の國民性を代表して滑稽文

修羅道の
の關の
聲矢叫
の音震
動せぬ
日も無
かりし
所に謠
曲八島

徳川時代

この時代
の前半
の精神

學をなせる、連歌の流行につれて、公卿・女房より僧侶に移りし文學が、更に武士の手に落ちたること等ならん。而して此連歌の旺盛は、和歌の煩瑣なる法門より脱せんとする洒落の氣風の反映なれば、これはた武士佛教・禪宗の不立文字に關係なからんや。

應仁以來、否元弘以來、否承久以來、否寧ろ保元以來、平安の都はその名のみにて、又修羅道の關の聲、矢叫の音震動せぬ日も無かりしに、元和元年大阪夏の陣ぞそのをはり、三河國の住人海道一の弓取徳川家康によりて、花のお江戸に三百年の昇平は開かる。之を徳川時代といふ。

げにや此時代に生れあへるもの、彼山・此水血に染められぬはなき父祖の物語に耳を掩ひて、誰か今の己が幸福を悦ばざる。此心は即ち我より古をなす大精神なり。見よ前時代を

通じて漲りし模倣の弊は一掃せられて、新著眼・新傾向の到る處に起れるを。

徳川氏が最も力を注ぎしは漢學なりしかば、漢學先開けて仁齋の新著眼を見、和歌も之に促されけん、亦契沖・茂睡の新

研究・新主張起れり。奇なるかな仁齋は京師に、契沖は大阪に、

茂睡は江戸に出でて、偶公卿町人・武士三階級の中心地を代

表したり。但し大阪の誇は和歌にあらずして、檀林風の俳諧・

浮世草子及淨瑠璃にあり。蓋し大阪は町人所・頼むと云ふて

大阪は町人所
云々難
波入江
船

引かぬ所・聞かぬと云ふて死する所にて、商賈ながらに任俠

風をなして、天平棒一本に一代の所帶をかつぎ上ぐる輩多

文學と
土地と
の關係

く、平民の勢力最も振ひたるを以て、前代の習慣に束縛せら

れず、浮世草子・淨瑠璃は平民社會を細寫して、實際的なる人

生觀の上に現代を謳歌し、檀林亦放膽なる修辭法を敢てし
て憚らざりしならん。あゝ文學が土地の影響を受くること
も深きかな。

幕府の威權未だ加はらず、社會の階級なほ寛なりし間こそ、
かゝる新文學の活動も認められたれ。八代將軍以後文學の

中心江戸に移りて、世はひたすらに消極政略・制慾主義の呪

ふ所となるや、儒學の實踐・國學の尙古の聲は文學の根本を

も動かして、草雙子を讀み本とし、讀み本を歴史小説として、

勸善懲惡の紋切形となし了んぬ。但しその爲に風教を維持

せる效尠からず、延いては明治維新の大業をも助けたりと

いはるゝなり。

徳川時代ほど太平なりしは國史上空前の事實なれば、文學
の樂まれたる範圍も頗る廣かりしを以て、是迄に隱見せし、
あらゆる國民性は各その特色を發揮したるこそめでたけ

この時
の後半
の傾向

あらゆる
國民性

學文と政治

太平の
眠な覺
ます正
喜撰た
杯つた
杯に夜
れも寝
れず(狂
歌)

れ。自然を愛する氣風は蕪村の如き純客觀の俳句となり、樂天洒落の氣風は蜀山人等の狂歌となり、一九三馬の滑稽本となりたる類これなり。この蜀山人・一九三馬等の輩出はいはゆる大御所様時代の前後にて、さきの大阪が文學の中心たりしに對して、江戸のさかりを示すものたり。此等の氣運に動されけん、新古今以來の和歌の積衰も、流石にその京都にて、小澤蘆庵・香川景樹等によりてすくはれたり。

その後、たつた四杯の正喜撰に夜も寐られぬ世となりて、幕府の威權漸く動くや、國學尙古の思想は王政の復古を、儒學中外の論辯は外夷の擊攘を考へしめ、剩へ普く四民に讀まれし歴史小説は、その忠臣義僕たらんことを促してやまず、ここに志士の奔走浪士の横行となりて、攘夷に起りし騷は尊王に終りたり。此尊王の二字には國民一齊に我を忘れ、身

明治時代

新舊思想

歐化主義

を忘れ、家を忘れて相一致するを見て、誰か祖先を尊ぶ國民性の發露と知らざらん。

明治維新以來すでに四十年、その初の十年は社會のあらゆる方面と事物とに破壊あらざるはなく、革新あらざるはなし。こゝに新舊思想の衝突を見しが、西郷星の落つると共に世は新思想の勝となりぬ。

この衝突の一半は政治論となりてのこり、新聞雑誌これより盛なり。その影響として政治小説先出で、之と並びて翻譯小説行はれ、聖德太子以來わが思想を培ふものとして重ぜられたる儒佛二教は遂にその株を奪はれたり。知るべし、歐化主義の二十年頃に於てその高潮を示せるを。

憲法布かれ、議會開かれ、萬民の思想を支配せし政治もや、陳腐なる題目となれり。折柄社會の秩序も整ひて人心に餘

國粹保存

わが國の國民の天職

裕あるより、文學始めて世にもてはやされぬ。抑著實なる文學は必ず前時代のそれを基礎とせざるべからず。此に古典の研究起りて、他の國粹保存主義と相合して、前の歐化主義に對せり。新しき小説^{二十一年}俳句の新研究、壯士劇皆此時に起る。二十七八年の役に國民の自覺成りて、東西の長所を採りて我に融化せんことの、わが天職なるを知るや、あらゆる文學は清新の氣に満ちて、教育の進歩につれて、建國以來曾て有らざる盛況を呈しぬ。而も祖先を尊ぶ國民性は萬古易らず、二十七八年の役に、^{二十七年}遺憾なく發揮せられ、忠君愛國の美風は朝日の御旗と俱に萬國の仰ぐ所となれり。今は國威の隆前古に比なく、教育の盛後昆に傳ふべし。古に鑑みて今をはかるに、更に大文學のこの鴻猷に稱ふものなかるべけんや。

明治時代

概説

大事變
上下心を一にし、
盛に經綸を行ふべし、
御誓文第三

その急務

舊來の陋習を破り、
天地の公道に基くべし、
(同第四) 智識を世界に求め

明治の維新は、政權の移動幕府の創立に比すべく、社會組織の革新大化の新政にも過ぎたる大事變なり。此大事變にあひても、直に上下心を一にして皇基を振起せしは、美しきわが國體の精華なりけり。

維新の急務は智識を世界に求むるにありき。舊來の陋習を破るにありき。封建の制爲に壞れ、^{四年}學校の制爲に布かれ、新聞紙爲に起り、^{二年}電信、^{五年}汽車等交通の利器爲に採用せらる。

かゝる際に新舊思想の衝突あるは免れ難き數ならん。一たび佐賀に、^{七年}二たび山口に、^{九年}三たび大に薩南の天に爆發せしが、何れも一敗地に塗れて、明治政府の根柢いよく固く、西洋

に皇起
を振起
すべし
(第五回)

わが國
體の影
響

國民の
自覺

崇拜の風うたゝ熾なり。
新しき思想の中にも、或は實利主義あり、或は平等主義あり、或は國家主義あるなど、學ぶ所によりてその流を異にしたれど、其源は一に泰西にあらざるはなし。此平等主義は、政治上に現れて、所謂民權論となりたれど、流石に佛國風の極端なるものとならざりしは、忠君尊祖の國體の賜なりけり。
物窮まれば變ず。二十年以後は國民の自覺もおひくゝに萌して、教育勅語も發せられしが、二十七八年の役こそ大なる覺醒を與へたれ。夫、清國たる、大化の昔より先進國として畏敬せし所、儒學といふ道德説の發生せし所なるに、一戰克く之に勝ちたれば、國民齊しく自信自重する所を得て、日本主義の主張などともなりたれど、歐米諸國との關係は日一日に密となるを以て、その文物の影響著しく、遂に彼の長を採

りて我に融化せんと試みるに至れり。
ついで三十七八年の役亦名譽なる終局を見しかば、國民の自覺は一層の強さを加へて、あらゆる方面に生々の氣の漲らざるはなし。豈愉快ならずや。
今此時代の文學として、特に左の各種につきて述べんとす。
歌謠―和歌(新派) 俳句(新派) 新體詩
散文―小説

和歌

いかに
和歌は
見られ
たるか
新進の
手

神代のまゝの姿を留めたる和歌は、さすがに維新の革新にも些の影響をも受けざりき。否、維新の氣を吹き込むに値せぬものと見棄てられたるなり。然るに二十年前後古典の研究究盛になると俱に、和歌も新進の士の手に收めらるゝや、其

内容の充實をはかり、從來の即興的なるに比して、深き多き思想を含ましむるに勉め、著想聲調に亦大なる革新を施して、此時代の新産物と數へらるべくなれり。

その先鞭を著けたるを落合直文の淺香社とす。與謝野鐵幹

その門より出で、^{二十九年}「東西南北」に一世を驚かし、三十四年より

「明星」を發行して、いはゆる^{二十九年}「明星派」を起しぬ。之に對して竹柏

明星派
と竹柏
園派

園派あり。佐々木信綱の率ある所。作風新舊の間に出入して、その溫雅なるは明星派の雋拔なりと相稱へり。

俳句

俳句の
特質

紫吟社

その形の短小なる、その趣味の特殊なる、俳句も亦久しく當代の影響を受けざりしが、小説を以て傳はるべき尾崎紅葉はその手をこゝに伸して、^{二十二年}紫吟社を開きぬ。所在の月並宗匠

正岡子
規

寫生文

は、書生俳諧として冷罵し去らんとせしが、新機運は常に青年の手にあり、明治の新俳句はこゝに起りぬ。

同時に正岡子規あり。此は蕉風より降りて、天明の蕪村を模

範とせしが、なほ思想に、聲調に、明治の特色あり。日本新聞及

雑誌「ほとゝぎす」にその作を公にせしかば、世に之を日本派^{二十四年}

といふ。虚子、碧梧桐その高弟たり。

杜鵑が世を驚し、今一聲に寫生文あり。客觀の事物を直寫

するの謂なり。客觀の美は蕪村の俳句の生命なれば、その著

眼を以て文を綴らんとするなり。

新體詩

明治の新體は實に新體詩なり。新體詩の起れるは、その意寧ろ和歌の革新にありけん。

新體詩抄
文學界

此名は十五年の新體詩抄に始まる。二十二年頃より之に従事する作家輩出せしが、文學界の同人は、調に七五の舊式を破り、想に世に悶え人を恨むる新様を出して、文學上の一境いよく開かれぬ。

二十七八年度

二十七八年戦後、新體詩の氣焰更に揚り、武島羽衣、島崎藤村、先名を成し、が、土井晩翠亦遒勁の調を以て世の注意を惹きぬ。

最近の傾向

その後詩論いよく進み、是まで抒情に偏したりしものは、更に敘事の域にも入り、薄田泣菫、蒲原有明等その著名なるものたり。

小説

新聞記

一藩の陪臣より卿參議に擢でられし功名を慕ふ念、折柄輪

者の文筆

入せられし政治思想は、相合して幾多の新聞記者(政論家)を出し、が、渠等は或は翻譯小説を出し、或は自ら政治小説を筆したり。經國美談「佳人之奇遇」等これなり。

小説神髓

十八年坪内逍遙「小説神髓」を著して、小説は一種の藝術なることを説きて、之を戯作と輕視するを戒め、又その本領は寫實にあり」と論じて、前時代の専ら勸懲の具に供したる傾向を非難せるは、いかに世を驚し、ぞ。ついで「浮雲」出で、人物の性格描寫も試みられ、而も當代の新舊思想の衝突を材とせしかば、讀書社會は一方には彼議論の可能を認め、一方には此結構の新雋なるを喜びあへり。

浮雲

硯友社の紅葉の妙美

時に硯友社の諸子の、いづれも新教育を受けて泰西文學を味へるもの、指を此に染めたり。その巨擘を上にいへる紅葉とす。紅葉は寫實の模範を我國に求めて西鶴を得て、その趣

言文一
致體

露伴

向文章を學びたり。之と並びて山田美妙あり。彼が現代を細寫し人生を活現する小説の文體としては、言文一致の自在にして精細なるを取らざるべからざるを看破して、この一體を工夫したる功は、輕々に看過すべからざるなり。別に幸田露伴あり。初は亦西鶴を模倣せしが、遂に其本領を發揮して寧ろ理想派に近づけり。

心理小
說最近の
傾向

げにや、當時は寫實といひ、理想といふも俱になほ幼稚にして、未だ個人性を發揮するに至らざりしが、二十七八年の交より心理小説起り、特殊の人物を取りて、特殊の觀念思想を寓し、以て寫實以外のあるものを捉へんとせり。紅葉の「多情多恨」最も名作とせらる。樋口一葉この比の閨秀作家なり。心理小説の弊は、敘述煩瑣にして、動もすれば廣き人生を包含せぬに至れり。こゝに新寫實的傾向起りて、實世間の人物

をありのまゝに直寫すれば足るとせり。かくの如きは、却て二十年頃の硯友社の言草に似たれど、その間に皮相と精神との著しき相違ありて、長足の進歩を示せるこそ昭代の譽なれ。

徳川時代

概説

慶應三年の政權返上より洅りて、慶長五年の關原の役まで凡二百七十年を徳川時代といふ。

關原の役終りて徳川氏の威權定まりぬ。家康おもへらく、戰國の慘は、社會の階級弛みて、個人のなすがまゝに任せたるに原因す。須らく學問を興して名分を正すべし」と、林羅山を

家康の
著眼

我より古をなす大精神

個人の勢力は認められず

その原因もふべき数

延きて顧問とし、力を文教の振起に注ぎぬ。やがて文教は盛になり、既に述べたるが如く、我より古をなす大精神は、其文教の上に活動して、あらゆる方面の革新となりたり。その中心地は大阪。その時は元祿。

既にして、世は太平に狃れて、前日の意氣を失ひ、階級の制なりて、公卿・武士・町人・百姓の別侵すべからずなりぬ。その結果は家系の尊重となり、職業の世襲となり、果は個人の勢力を認めざるに至りしかば、人はたゞ才を屈して古人の跡をたどるのみなり。然れども事の此に至れる、なほ他に原因なからんや。

羅山幕府に登用せられてより、諸藩争うて儒者を用ひしかば、漢學の盛なる前古に比なけれども、その感化は學者に限られたり。佛教亦、天草の亂後は、政治的に信仰の源となりた

武士道

文化文政の隆

りとはいへ、人心を支配する力は如何あらん。然らば大多數の徳義は何によりて維持せられたるぞ。武士道の完成これなり。蓋し武士道とは、わが國民性たる尊祖尙武の氣象が、儒教の名節、佛教の制欲等の思想に助けられて成りたるものにて、平安朝の末、豪族起りて主従の關係密となりたるに萌して、戰國時代に洗鍊せられ、こゝに及びて武士無上の道徳律となりたるなり。後心學起りて、専ら町人の間に行はれ、亦親に事へ、家を齊ふる要道を教へぬ。此等は自己をすて、君に家に殉するを主旨とす。個性の發露を妨ぐる亦已むを得ざるに非ずや。

世はなべて舊套を逐ふ。而もなほ文化文政の交、江戸文學の盛を見しは何故ぞ。國學ますく盛になりて、古典の研究開けて、内容の豊富をいたし、又太平の久しき教育普及せる爲

幕府と
名分の
學

ならん。

家康が獎勵せし名分の學は、反て幕府の存在を容さざるに至りしが、外交問題の起るにあひて、つひにその思出多き大阪城に十五代のあはれをとめたり。

此時代の文學の左の種類につきて述べんとす。

歌謠——和歌、狂歌、狂文、俳諧、俳文、川柳、淨瑠璃、附脚本、散文——雜文學、小説

和歌——狂歌狂文

古今傳授を以て有名なる細川幽齋はながわゆうさいは、此時代の初まで生存して、堂上の門人も少からざりしが、元祿革新の機運は和歌の根本的研究を促して、傳授のとるに足らぬを看破せしめて、長流・契沖・茂睡ちせう・けいしゅう・もすいを出し、かくて和歌は學者の手に歸したり。
2316號 2381號 2386號

傳授探
るに足
らす

萬葉の
研究

縣居門

歌に平
語を用
ふべし

桂園派

長流亦大阪の人、萬葉の研究者なり。

契沖に次ぎて萬葉を研究せしは加茂眞淵まことぶちなり。眞淵おもへ

らく「歌は眞心を表すを尊ぶ。然るに歌の眞なるはたゞ萬葉に在り」と、つひにその自ら詠める歌も萬葉調となりたり。眞

淵は京都に學びて江戸に帷を下し、が、此こと文學の中心

が江戸に移りし一因たりき。その門に橘千蔭・村田春海はなばな・むらたはるみあり

て歌に長ぜしが、彼等は寧ろ三代集の風を慕へり。
2345號 2347號

この時京師に小澤蘆庵あしあんあり。歌に平語を用ひんことを主張

し、その作にも清新の調ありしが、香川景樹かげじその説を繼ぎて、

和歌の道は「性情の誠を棄として分け入らんには、自ら進み易し」眞淵の如く古辭廢語にからめられては、天真の流露い

づくにか在らん、耳近き語によりて、端的の感を詠み出すこそ歌なれと唱道せり。その門に熊谷直好・八田知紀等あり。千
2329號 2333號

狂歌

狂文

種有功の如き堂上方さへもその流を汲むに至れり。

文藝の中にも最も神聖視せらるゝ和歌に、似もつかぬ世俗卑近の材を取り合はせて、滑稽ならしめたるを狂歌とす。蜀山人、鹿都部眞顔等を巨擘とす。この意義を更に文に應用したるは狂文なり。

不二山を詠める長歌及其の反歌

加茂 眞淵

磯間より、そがひに見ゆる駿河の海、沖つ波路は狭きかも。ふり放け見れば相摸根の、八重山峯は低きかも。天の原なる富士の根の麓を出で、風のまに横をる雲に、駿河の海沖もかくろひ、相摸根の峯も雨ふり、時の間に雷も鳴り行けど、六月の照る日の空にあらはれて曇るとも無く、常夏に雪ぞ降りける不二の高根は。

不二の根の麓を出で、行く雲は、足柄山の峰にかゝれり。

鬼念佛圖贊

蜀山人

蝸牛の角折れては蟬觸のあらそひ、歌み外面は夜叉の如しといへども内

心菩薩の道にいれり身を墨染の奉加帳つく度ごとに奥山の鐘の撞木はなまいだく

俳諧 俳文 川柳

檀林

宗因

貞門

正風

元祿革新の機運が、大阪の平民的勢力によりて、そこに檀林の一派を建立せしことは既にいへり。此派は滑稽戲謔を以て俳諧の能事とし、材を實社會の平俗卑近なるに取り、且佶屈なる漢語・法外なる字餘りを試みて、その體を新奇ならしめたり。西山宗因を其巨擘とし、西鶴その門に遊べり。

是より先、京都に松永貞徳の貞門あり。貞徳はかの幽齋に就きて和歌を學びたる人なるが、寧ろ俳諧を以て傳ふべく、御傘を著して俳諧の格式を定めたり。

宗因と俱に、貞徳の孫弟子たる芭蕉は實に正風の祖なり。松

芭蕉の
特徴

尾桃青といひ、伊賀上野の人。李杜の詩、西行の歌を好み、兼ねて禪に逢かりしかば、貞門・檀林の俳諧が、宇宙の玄理と人生の奥底とに觸れぬを惜みて、此短詩形を以て自然の祕鑰を開かんとして。蓋し自然を愛するは本來の國民性なりとはいへ、芭蕉の如く深く之を内視せんと試みたるは異數に屬せり。その門に其角・嵐雪等あり。

連歌と
發句

抑俳諧とは俳諧體の連歌の略にて、連歌とは長短句を交る交る附き合はせて、其間に一卷の趣向を寓するにあり。然るに後には發端の第一句のみを獨立せしめて、之を發句といふに至れり。發句は我國の最短詩形にして、複雑なる思想を含み難きを以て、一の情景に伴ふ幾多の聯想の中に、一種の美をあらはさんとするなり。此幾多の聯想が、美しく聯結して成れるを俳文といふ。風俗文選「鶉衣」等その集なり。

俳句の
特質

俳文

川柳

發句はその形小さくその用語自由なるを以て、誤て平民の手に弄ばるゝに至りしが、芭蕉が主張せし所は、天明の比・蕪村等出で、之を發揮せしに止まり、その前後は理窟に落ち、俗化せしのみなりき。蕪村は文人畫にも堪能なりしかば、その句に有聲の畫の妙あるもの多し。

和歌に狂歌ある如く、俳句にも狂句あり、之を川柳ともいふ。あらゆる人事を材として、奇警なる諷刺をなせる、江戸子の機智頓才によるもの多けれども、亦國民性の一面なり。

操

金平本

淨瑠璃 附脚本

淨瑠璃の名は、此種のものゝ祖に、淨瑠璃物語あるに由る。三絃の傳はるに及びて之を樂器とし、人形に合せて、操座にて語ることゝなりき。その曲としては前に金平本あり、荒唐粗

門左衛門

厲の英雄譚にして、關東尙武の氣風にもてはやされしが、既に述べたる如く大阪の地に榮えて、近松門左衛門の才筆一世を驚かしてより、永く文學上の至寶となれり。

門左衛門は長門の人、京師に出で、仕官せしが、後淨瑠璃節の名人竹本義太夫に聘せられて大阪に下り、前後四十年、幾多の新曲を出し、樂と文と相待ちて浪華名物の一となれり。その作時代物と世話物との二に分れ、前者にありては主として事件の變化を寫さんとして、荒唐不稽にも陥りたるが、後者にありては特に義理と人情との衝突を描きて、能く現實の世相を醇化して理想の眞相に接近せしめたり。

出雲半二

門左衛門歿後、なほ竹田出雲近松半二あり。合作の風起りて、舞臺面の賑かさは却りて進みたりといへども、散漫にして統一の妙なし。且演劇の盛になるにつれて、操は壓倒せられ

て、明和安永の頃には頓に衰へぬ。

吾人はこゝに脚本を附說せんとす。淨瑠璃と操人形との關係は、脚本と俳優とのそれに同じ。この意味よりいへば、淨瑠璃また一種の脚本たり。但し操は専ら人形を用ふれども、脚本は生きたる俳優によりて演ぜらるゝを以て、全く對話より成るを異とす。

出世景清の一節

近松門左衛門

さて(賴朝)御土器賜はり、諸國の大名残りなく皆々杯さし給ふ。重忠仰けるは、かゝるめでたき折といひ、且は我君御慰みの爲、吾殿屋島にて功の様子語つて聞かせ給へ。内々君も御所望ありしぞ。平に平に」と有りければ、賴朝公を始め參らせ、満座の人々一同に「はや疾く」と望まると、景清辭するに及ばねば、袴の裾を高く取り、御前に色代し過ぎし昔を語りける。いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんと欲す。能登守教經いふやふ、『去年播磨の室山備

中の水鳥鴈越^{*}に至るまで、一度も味方の利なかりしこと、偏に義經が謀い
 みじきに依つてなり。如何にもして、九郎を打ち取る謀こそ有らまほしけ
 れ』とのたまへば、景清心に思ふやう、判官なればとて鬼神にてもあらばこ
 そ命を捨てば易かりなんと教經に最後の暇乞ひ、陸に上れば、源氏の兵餘^{*}
 すまじとぞ駈け向ふ。景清之を見て、物々しやと夕日影に打物ひらめかい
 て切つて掛かれば、こらへずして、刃向いたる兵も四方へばつととぞ通げ
 にける。さもしや方々よ、源平互に見る目も恥し、一人を止めんことは案の^{*}
 うち物小脇にかい込んで、某は平家の侍景清と名乗りかけ、手取にせ
 んと追うて行く。三保の谷が著たりける兜の鏝を取り外し、二三度通
 げ延びたれども、思ふ敵なれば通がさじと飛びかゝり、兜を押ッ取りエ
 ヤと引く汐に、鏝は切れて此方に止まれば、主は先へ通げ延びぬ。遙に隔て
 て立ち歸り、さるにても汝恐しや、腕の強きといひければ、景清は「三保の谷
 が首の骨こそ強けれ」と笑つて左右へ退きにける。昔を忘れぬ物語御恥し
 う候ふ」と語り給へば、人々は一度にどつとぞ感じける。斯くて我君御座を
 立たせ給ひければ、大名、小名續いて座敷を立ち給ふ。景清君の御背姿をつ

くづくと見て、腰の刀をするりと抜き、一文字に飛びかゝる。各「これはと氣
 色をかへ、太刀の柄に手をかくれは、景清しどつて太刀を捨て、五體を抛ち
 涙を流し、あゝ南無三寶あさましや。いづれも聞いて給はれ。かくあり難き
 御恩賞受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返る恨の一念、御姿を見申せば、
 主君のかたきなるものと、當座の御恩は早忘れ尾籠^{*}の振舞面目無や、眞
 平御免被らん。誠に人の習にて、心に任せぬ人心、今より後も我と吾身を諫^{*}
 むるとも、君を拜む度毎に、とても此所存は止み申さず、却つて仇とや成り
 申さん。とかく此兩眼の有る故なれば、今より君を見ぬやうにと、いひも敢
 へず刺添抜き………

雜文學

吾人は、雜文學の名を以て、小説脚本以外の散文を述べんとす、雜文學をその體より別てば、擬古文と和漢混和文との二となる。

漢學

混和文
の起る原因

その名
家

水戸學

國學

屢いへる如く、徳川氏の保護せしは漢學なるを以て、幕初新
 銳の氣に助けられて、林家の宋學の外に、中江藤樹の陽明學・
 伊藤仁齋いとうにんさいの古學・山崎闇齋やまざきあんさいの垂加學・荻生徂徠おぎせいそらいの古文辭學等
 起りぬ。此等の士はいかに漢文に堪能なりとも、漢文さまで
 盛ならざる讀書社會に向ひて、言を立て書を著さんとする
 には之を用ゐるがたきを以て、漢文脈を交へたる假名文に頼
 らざるを得ず。これ所謂和漢混和文なり。貝原益軒かいげんえきけん・新井白石にいしやく・
 室鳩巢むろとぼ・元祿の頃に出で、俱に著作に富み、益軒には教訓物・
 紀行書多く、白石には歴史・考證物多し。やゝ後れて湯淺常山たうせん
 あり。

これより先、水戸に義公あり。彰考館を開きて、漢文にて大日
 本史を編し、なほ大義名分の説を立て、天下を率ゐらる。
 この自由研究の風と、大義名分の觀念とより誘起せられた

擬古文
の起る原因

漢學の
風氣一
變す

縣門能
文の士
等

る一現象は、國史國文の上に、わが國體の眞意義を見出さん
 とせる、所謂國學の興起なり。伏見の祠官荷田春滿かたはるみちその首唱
 たり。眞淵まへこの門より出で、我國固有の道を明らむるには、
 儒佛等の思想入り來らざりし時代の文章に親まざるべか
 らずとて、その作る所に古語古調を用ゐしかば、爾後國學者
 の文は概この擬古體となれり。

然るに漢學にありては、學説には井上金峨いの上きんがの折衷派詩文に
 は山本北山等の古文辭を排斥するもの等起りて、風氣やう
 やく一變せんとす。

本居宣長ほんけのりなが眞淵の門より出で、博學高識一世に秀で、古事記
 傳に三十五年の心血を注ぎて國學を大成したる外、語學の
 創見も少からず。その著作はた擬古文の上乗なるものあり。
 春海はるみ・千蔭ちいんともに亦文名あり。春海の門の清水濱臣しみずはまのりも能文の

白河樂翁

譽高し。又宣長歿後の弟子なる平田篤胤（1798-1860）は、古道の宣傳に力めたり。

漢學と
國民道徳

文學の保護者として、義公に比すべきは白河樂翁なり。文化文政の頃大老となりて、私に塙保己一（1796-1858）が群書類（1799-1800）の編纂を助け、又集古十種（1811）の撰を監し、自ら花月草紙（1812）を著せり。樂翁は彼寛政三博士（1791）を登用して、異學（1814）の禁を布きたる人なり。蓋し徳川氏が漢學を奨励せしは、その尙古的精神階級的精神を利用したるにて、此等の精神は徳川氏の政策と一致して、治國の助となりたるのみならず、わが祖先を尊び、實際を貴ぶ國民性と相まちて、國民道徳の中心となりたり。

詩文の
大家

然るに、後には漢學も文藝として玩ばるゝに至り、詩には菅茶山（1730-1802）・賴山陽（1733-1805）・廣瀬淡窓（1782-1846）・梁川星巖（1796-1854）等の作家あり、文には松崎慊堂（1784-1854）・佐藤一齋（1796-1854）・鹽谷宕陰（1804-1854）・安井息軒（1804-1854）等の大家を出すに至りしが、

混和文
衰ふ

その爲に、却て漢學者は直に漢文に力を注ぎて、混和文の名家なきに至れり。

東西學
者の氣
風

國學にても、春海・千蔭・濱臣等の江戸に在りしものは、文藝に向ひ、宣長の如く京都に近きものは、國體論より勤王論に進める跡あり。漢學者も、江戸にては、侯伯の門に出入して、詩酒に徵逐せしに、京都にては山陽・星巖の如き慷慨家となり、この京都の氣風は、幕末・勤王・攘夷の一大勢力をつくりたり。

小説

我より古をなす元祿（1688-1704）の世に、浮世（1704-1735）今様の義草紙（1735）あるも宜なるかな。その作者は誰ぞ。

西鶴

西鶴は俳諧を學びて高足と許されしが、中年より、その輕妙なる雅俗折衷の文を以て、現實主義・快樂主義の風俗社會を

芭蕉巢
林子と
の比較八文字
屋本

洒落本

草雙紙

讀本

京傳

寫實したり。西鶴は屢、芭蕉巢林子と比せらる。芭蕉は眼を深
き自然に注ぎ、巢林子の著眼亦人心の機微に觸れんに在り
しが、ひとり西鶴は精微なる觀察力を以て、現實を寫すに止
まりて、亦何の理想の影をも認められず、是中々に現實主義
樂天主義の國民性に適したるものならん。その流を汲める
ものに八文字舎本あり。寛延の比まで盛に行はれぬ。
文運東遷したる江戸に、此寫實の波を揚げしは洒落本なり。
同時に又草雙紙あり、開帳見世物の流行などを寫したる繪
入の短篇なり。此兩者に對して、漢文の流行より來れる支那
小説の翻案あり、國文の隆盛亦助くる所ありて、遂に讀本と
なりぬ。その作者に京傳・馬琴あり。
山東庵京傳は初筆を洒落本に染めて盛名ありしが、樂翁公
の出版物を取締るに及び、驚きて讀本に向ひたれど、遂に馬

馬琴

時代の
影響滑稽本
天明は
喰ふや
喰はぬ
に八九
年狂言

琴の敵に非ず。

曲亭馬琴は、二十四歳より八十二歳までに、書き下せる者二
百に餘り、八犬傳の如き首尾百八十回に上りぬ。博覽多讀の
根氣に任せて、脚色亂れず、思想涸れず多々益辨ずる著作堂
亦偉なるかな。偉人も猶時代を離るゝ能はず、家系尊重、個性
没却の思想は彼の筆を呪うて、作中の人は各種の徳の權化
として立ち働くに止まりて、復内的心理の發露なし、又好ん
で歴史小説を作れども、時代の背景明かならず、此は餘りに
己が理想に引き合せん爲に、歴史の事實を潤色せし故なら
ん。同時に滑稽本あり、豊かな御代にたと寛政と謠はれし大
御所様時代に、現實的・樂天的なる國民が、諸膝を栗毛の駒と
して、世をわたるをかしさ、樂しさを敘せるもの、一九三馬を
其作者とす。

草雙紙の繪入の脈を引きたるに合巻物あり、柳亭種彦の田舎源氏をその冠とす。

鹽井川

十返舎一九

それより鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨強くして、橋落ちけるにや、行き交ふ人みづから股引を取り、裾まくりあげて、こゝを渡るに、彌治郎、北八もいざや引き連れて渡りなんとする折柄、京上りの座頭二人連、此川の歩渡りなることを聞けるにや、一人の座頭犬市 モシ川は膝ざりもござりまするかな 北八 左様左様、併し水が早いから、おめえ方あぶない、用心して渡りなせえ 犬市 ハア 成程水の音が餘程早いと云ひつつ石を拾ひ、川の中へ投げ込んで考へ 犬市 いや此處らがどうか浅い様だ、こりや猿市、二人ながら脚半を取るも面倒だ、御主若役におれをおぶさつて渡れ 猿市 ハ、ハ、するい事をぬかす、拳で參らう、何でも負けた者がおぶつて渡るのだ、がよしか 犬市 こりや面白い、サアこんな梅で犬市りやんごうさい／＼と片手拳打ちながら、兩方から左の手を出し、互に拳を打つ手を握り合せ

犬市 サア勝ったぞ／＼ 猿市 エ、忌々しい、そんなら此風呂敷包を貴様一所にしょわつせえ、それこれの、さあこい、さあこい(と支度して、背中を向ける彌次是は有りがたいと猿市におぶされば、猿市連の犬市と心得て、さつと川へ這入り、難なく向ふへ渡ると、此方の岸に残りたる犬市)ヤイ猿市、どうする、早く川を渡さぬか、猿市向ふ岸にて聞き附け腹を立て、こりや串談なやつだ、たつた今おぶさつて渡したに、又そつちえ行つて、おれをなぶるな 犬市 こりや己れ、兄弟子に向つて言語道斷な、早く來て渡さぬかと白い眼をむき出し腹立てる故、猿市しかたなく、又こちらへ渡りて歸り 猿市 サアおぶさりなさろ(と背中を出す)北八しめたと手を拍つておぶされば、猿市又さつ／＼と川へ這入る、犬市は大にせき込み、これ猿市どこに居る(猿市川中にてイヤ、こいつは誰だ(と北八を川の中へどんぶり落す)北八あい助けてくれ／＼

近古時代

概説

此時代の
混亂

江戸時代の
關係

徳川時代に先だつ四百餘年は、實にこの近古時代にして、政權の所在より見るも、鎌倉幕府あり、室町將軍あり、織田氏は安土に於てし、豊臣氏は桃山に於てし、國家の大事より見るも、弘安には元寇來り侵し、文祿には六師海を渡り、南北朝の分立、應仁の亂の疲弊ありたる等、殆ど枚舉に遑あらず、いかに此時代の混亂なりしぞ。

かゝる時代なるを以て、文學の玩ばれたる範圍の限られたること、江戸時代に比すべくもあらず。その内容の乏しき亦同日の論にあらず。されども、徳川幕府に保護せられし宋學は此時代に傳來し、その式樂となりし能樂は此時代に發生し、淨瑠璃を生みし謠曲も、小説を孕みし御伽草子も、俳諧と根を同じうせる連歌も、脚本と趣を一にせる狂言記も皆此時代に成れるを見れば、文學史上決して輕々に看過すべからざるなり。

佛教と
時代の
文學

武士道
の根柢

社會の
秩序

かゝる混亂せる時代とて、人心唯一の慰藉は宗教なりしかば、佛教は深く國民の思想に入りて、文學の内容にも、作者にも、その跡歷々たり。特にその甚しきは、文學が自己の目的を忘れて、弘法傳道の方便となりたる、かの傲岸なる義滿將軍が禪僧の前には叩頭禮拜したるに似たりけり。勇敢死を畏れざるはわが固有の國民性なりといへども、此時代ばかり之が演習をつけたるはなし。こゝに主従の關係確立して武士道の根柢成り、家名を重じ臣節を盡し、美談は幾多の軍記をのこしぬ。但し主従の關係は、名分正しき時にこそ治國平天下の方便たるべきに、承久の亂には義時も「さばかりの時は、胃を脱ぎ弓弦を切りて」と教へしも、南北朝の初には、將軍より天位を賜はらせ給ひたり」といふに至

りたれば、社會の秩序壞れに壞れて、應仁の大亂を見たり。
織田氏興り、豊臣氏繼ぎて、天下はゞ定まり、美術は既に桃山
時代の盛を見たれども、文學は之に伴はずして、此期終りぬ。
この時代の文學の種類は。

歌謠——和歌 連歌 謠曲

散文——雜文學 御伽草子 狂言

和歌

新古今集が此時代の誇なることは既にいへり。後鳥羽上皇
の勅によりて、定家・家隆等の撰ぶ所。當時は歌人輩出して、上
には歌聖といはれたまふ。後鳥羽順徳おはし、下にはかの二
人の外、實朝・西行等の作家ありしかば、華實かね備はりて前
後に傑出すといはる。

新古今

定家

西行

新葉集

傳授

定家は京極中納言と稱せられ、和歌の技巧群を抜き、且家學
の根柢さへありて、一代の仰ぐ所となりたれば、其一門は長
く歌道の門閥となりて、和歌所の所領をも私有するに至れ
り。西行はもと北面の武士。世を遁れて旅行を事とし、その作
清新を以て稱せらる。

新古今より以後、なほ十三回の撰集あれども、特色あるを見
ず。たゞ弘和中、宗良親王の撰ばれたる新葉集は後に勅撰に
擬せられたるが、南朝方の歌を集めたる者にて、生氣の溢る
るあり。蓋し境遇の然らしめしものならん。

歌道の門閥は、つひにその道を神秘にせん。爲に、傳授といふ
ことを起しぬ。新古今以來、技巧主義盛にして、古歌・古意の翻
案を以て趣向を立つる風ありしに、その古歌・古意にかゝる
制限を立つ。和歌の衰へたる亦宜なるかな。

連歌

鎌倉武士が、その清新の氣を以て、文學に貢獻する所あらざりしは、前に之を惜みたりき。されど武士の世なり。武士いつまで之に指を染めざらん。連歌は實にその手に落ちぬ。

菟玖波集

新撰菟玖波集

連歌の起りは頗る古かりしが、菟玖波集出で、より、いよいよ世に行はれて、和歌の勢力を蠶食シロしたり。ついで宗祇法師新撰菟玖波集を編む。連歌が和歌者流を離れて獨立せる文學となりしこと實に此時に始まる。和歌の如く煩瑣なる法門なきこと武士の率直なる氣質に適しけん、大にその間に玩ばれたり。

犬菟玖

や、後れて山崎宗鑑あり。之に滑稽洒落なる新趣味を加へて俳諧體の連歌を起しぬ。その撰に犬菟玖波集あり。此時代

五〇〇年

波集
一句の
讀捨

には、なほ言語の上に滑稽を弄するに過ぎずして、徳川時代に入れり。一句のよみすて實に此時に起れり。

われ一人けふの軍に名取川

君もろともににかち渡りせん

源 賴 朝

梶 原 景 時

雪ながら山本霞む夕かな

宗 祇

行く水遠く梅かをる里

宵 栢

河風に一村柳春見えて

宗 長

舟さす音もしるき明方

祇 栢

月やなほ霧渡る夜に残るらん

祇 長

霜おく野原秋は暮れけり

長 栢

(水無瀬三吟百韻下略)

謠曲

神樂

猿樂

能樂と
謠曲これに
現れた
る時代

南天柱に楠天井の一枚張の風流を盡し、金閣寺は、長く三代足利將軍義滿の名を留めん。されど吾人は寧ろ謠曲によりて渠を記憶せんとす。謠曲は實に室町文學の偉觀なり。わが國は敬神の國なり。その神事に神樂あるは天岩屋の故事に本づくものならん。後には神樂の外に猿樂の伎をも行ふに至りしが、義滿の童坊たりし觀阿彌、この猿樂に諸の舞を折衷して一の舞ぶりを定め、なほ舊に仍りて猿樂と稱しぬ。今いふ能樂これなり。この猿樂の爲に作りし章曲は即ち謠曲にして、一篇の結構に支那の雜劇を同化せし痕の見ゆるは、東山美術に水墨畫あると同じ原因ならん。

謠曲はすべて二百餘番。また時代物と世話物とに分る。その世話物には、子を失ひし母、主を失ひし臣の狂氣して世をうき旅に尋ねありく様を寫せるもの少からず。是果して何の

反映なるぞ。

景清

次第消えぬ便も風なれば、露の身いかに成りつらん。名乗是は鎌倉龜が江が谷に人丸と申す女にて候。さても我父惡七兵衛景清は平家の味方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる。未だ習はぬ道すがら、物うき事も旅の習又父故と心強く思ひぬの涙片敷く草の枕、露をそへていと繁き袂かな。道行相摸の國を立ち出で、誰に行方をとほとふみ、げに遠き江に旅舟の三河に渡す八橋の雲井の都いつかさてかり寝の夢になして見ん。詞やうく御急ぎ候程に是は早日向の國宮崎とかやに御著きに候。こゝにて父御の御行方を御尋あらうするにて候。(中略)

里人あら痛はしや先此う渡り候へ。いかに景清に申し候。御娘御の御所望の候。景清何事にて候ぞ。里人八島にて景清の御高名の様が聞し召されたき由仰せられ候。そと御物語あつて聞かせ申され候へ。景清是は何とやら

ん似合はぬ所望にて候へども、是迄遙々來りたる志、餘に不便に候程に語つて聞かせ候べし。此物語過ぎ候は、彼者をやがて故郷へかへして賜り候へ。里人心得申し候御物語過ぎ候は、やがて歸し申さうするにて候。景清いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸兩陣を海岸に張つて互に勝負を決せんと欲す。能登守教經宣ふやう、去年播磨の室山備中の水島鶴越に至るまで、一度も味方の利益無かりし事、偏に義經が計いみじきに因つてなり。いかにもして、九郎を討たん謀こそ有らまほしけれ」と宣へば、景清心に思ふ様判官なればとて鬼神にてもあらばこそ命をすてば易かりな」と思ひ、教經に最後の暇乞ひ、陸に上れば、源氏の兵餘すまじと駈け向ふ。景清之を見て「物々しや」と、夕日影に打物閃かいて、切つてかゝれば、こらへずして刃向いたる兵は四方へばつとぞ逃げにける、逃がさじと、景清さもうしや方々よ、地さもうしや方々よ、源平互に見る目も耻かし、一人をとめん事は案のうち物小脇にかい込んで、某は平家の侍惡七兵衛景清と名のりかけ、手取にせんとて追うて行く、三保の谷が著たりける胃の銚を取りはづし、二三度逃げ延びたれども、思ふ敵

なれば免さじと飛びかかり、胃をおつ取りえいやと引く程に、銚は切れて此方に止まれば、主は先へ逃げ延びぬ、遙に隔て、立歸りさるにても汝、恐しや、腕の強き」と云ひければ、景清は「三保の谷が頸の骨こそ強けれ」と笑ひて、左右へのきにける。地昔忘れぬ物語、衰へ果て、心さへ亂れけるぞや、耻かしや、此方はとて、もいく程の命のつらさ未近し、早立歸りなき跡を弔ひ給へ。盲目の暗き所の燈火、あしき道橋と頼むべし、さらばよ、とまる、行くぞとの唯一聲を聞きのこす、是ぞ親子の形見なる。

雜文學

和漢混
起りの
原因

擬古的のものと、和漢混和的のものと、の二あること、徳川時代に同じ。但し此時代に和漢混和的のものあるは、寧ろ國語の性質によれるならん。蓋し吾國語は母韻多く、且一定せる天爾波、助動詞文中に累出して、文章を流麗平板ならしむる患あり。故に雄壯莊重の文には漢語を用ゐて、これをすくは

方丈記

んとせるもの、即この文體の出でし故ならん。

方丈記は鴨長明の作と稱せらる。長明は此時代の初の人なり。ついで海道記・東關紀行あり。此二書が、和漢の古辭を織り

なして、一種の文とせる様は注意すべき現象なり。

十訓抄

や、後れて十訓抄・古今著聞書等あり。十訓抄に十箇條の教訓を立て、幾多の例語を附せしより此名あり。

和歌所の所領所有權の爭より、婦人の身を以て遙々關東に

十六夜日記

下りたるは阿佛尼にして、定家の子なる爲家の婦なり。その紀行十六夜日記は此時代の擬古文の上乗なるものなり。

徒然草

兼好の徒然草は、題目によりて文體を異にするのみならず、その思想も雜駁を免れざれども、その議論の深遠なるものに至りては、わが文學の珍たるもの少からず。

正大なる議論を以て南北朝の正閏を論ぜし、准后親房の神

神皇正統記

皇正統記は國文にて書ける議論文の白眉と稱せらる。

増鏡方

又増鏡あり。吉野拾遺あり。増鏡は承久の亂より建武の中興までを、拾遺は吉野朝廷の逸聞を錄せるもの。見るべし、大覺寺派と文學との關係淺からざるを。

平家物語

此時代に特筆すべきは平家物語と太平記となり。平家と同時に保元・平治物語あり。又平家と同じ事實によりて源平盛

太平記

衰記あり。平家の女性を描くや、綠の黒髪と俱に煩惱のきつ

戰國的女性

なをきりすつ者多きに、太平記に至りては、小楠公の母の如き、瓜生保の母の如き庭訓雄々しき戰國的女性を描くを好む。亦以て時代思想の變遷を見るべし。

御伽草子

近世平民文學の母たりしもの。此時代の末に發達す。因果應

御伽草
子と此
時代

報の理を含ませたる教訓物、又は英雄譚を多しとす。その形式は平安朝の物語によりたれど、その結構の大なく、又痛く通俗化せるは、文學を樂む餘裕なき時代の爲ならん。

狂言と
國民性

狂言

餘裕なき時代にも思ひ屈くぜずして、狂言に笑ひ合ひしは、吾樂天洒落の國民性を明かにあらはせるものなり。上にいひし猿樂は最初は滑稽を主とせるものなりしが、能樂となるに及びて寧ろ嚴肅のものとなりたれば、その滑稽の一面を傳へたるものに狂言を生じぬ。その文對話より成りて當時の口語を存す。

とぶかつちり

勾當罷り出でたるは此あたりに住居仕る勾當の方でござる。左様に御座れば、今日は菊一を連れ峨嵋へ参らうと存する。菊一あるか。菊一これに居ります。勾そなたを呼び出すは別の事でもない。峨嵋へ参らうとことぢやが、参りやらぬか。菊勾當様の参らさっしやれまするなら、参りませう。勾*おぢやれ。菊往きます。

勾のう菊一。あのとんと、云ふは川では無いか。菊あ、是はかい川と申します。勾いかう水が出たさうなぞや。菊待たしやれませい。瀬踏をして見ませう。石は無いか。ぢ*やまてい、いえ有るは、ま此處へ打つて見ませう。ドブ。あ、いかう深さうな。上み手へ打つて見ませうや。エイどぶりかつちり。はあ勾當様上みへ廻らしやれませい。上みが淺うござりまする。勾ヤイ菊一。負うて渡せ。菊こな様も渡らしやれませい。授。

道行人 罷り出でたるは道通りでござる。いや座頭が座頭を負ふて渡すと見えた某が負はれて渡りませうす。勾ヤイ菊一おのれ己を連る、はかやうな川なども負はれて渡らうと思つて連れ、急いで負へいの。菊こ、えござりませい。あ、いかう深うござりまするぞやうくの事して渡つたよ。道や

此時代
と前後
の文學
と關係

れさて、まん／＼と負はれて渡りました。句ヤイ菊一。己ばかり渡つて、なせに某をば置いて往たぞいヤイ。菊ワ句當様。又今の程負ひ越したに、足のまめな、なせに又そちらへ往かしやつたぞ。はれさて物數^す奇^きな目の見えぬ者をばあちらへこちらへさするが面白いか。ちやまてい、さ負はれさつしい。いえさて又負はれさつしやれ面白ござらうの。句何を云ふぞいやい。菊何いふと事があるものでござるかいの。ハ、深い所へ這入りましたわいの。句これ、おどれ何事しおつたぞ。菊轉びましたわいの。句やれさてぐつと濡らしおつた。菊始ので置かつしやりやよいこと、二度三度さつしやる所で、オ、濡れてさぶやな(下略)

蓋し和歌に對して俳諧體の連歌・平安朝物語に對して御伽草子・猿樂に對して狂言あるは、前代文學を味ふべき素養なき爲に、何れも平民的に通俗化せしめたる結果なりとはいへ、この爲に徳川時代の平民文學を開きたる功は没すべからざるなり。

平安朝時代

概説

文藝を
貴びし
内外の
原因

鎌倉室町時代より平安朝に入るときは、荒涼なる野路より繁華なる都會に進みし感なき能はず。いかにその政治史の第一頁の花やかなる。平安京は輪奐^{りんくわん}の美を盡し、坂上將軍の東征は長く蝦夷の憂を絶つ。而して當時わが國の唯一の模範たりし唐代は、支那歷朝にありても、最も文藝を貴びし者なれば、我國にもその風成りしに、剩へ文を以て家を興し、藤原氏遂に政權を握りしかば、その勢更にすさまじく、滔々としてやむ所を知らざりき。但しこの爲に、古來尙武の風失せて、文弱に流れしことは既にいひたり。

「吾王族當爲天子、公藤原氏能爲我關白乎」とは門閥の前には、

歴史も才能もなきを證する言ならずや。此天慶の亂終りて、
京都¹⁵⁰⁰は再び大平の夢を貪りしが、地方はこの時より解體し
初めて、亦延暦の昔に非ず。里内裏に一時を忍び給ふことと
なりぬ。

當時交通の不便は京都と地方との隔絶を致したりとはい
へ、又かゝる地方の事情は念頭に上すことなく、藤氏一族は
政權の爭奪に維日も足らざりき。抑藤氏が政權を得る方法
は時の外戚たるにあり。こゝに皇后といひ、中宮といひて後
宮は天に二日ある觀あり。豈競争のその間に起るなからん
や。和歌の贈答はその才を現す所以なりしを以て、争うて才
媛^{あま}を引きて己が用となしぬ。即ち後宮は文學の淵叢、女房は
文界の明星となりき。その文學があらはれにつきくしきを
主とせる情念偏重に陥りしも亦宜なりけり。

藤氏政
權を得
る方法

此世を
ばわが

世とぞ
思ふ望
月の：
（藤原
道長）

作者の
異動

「望月の虧けたることなしと思へるは」道長一代の榮花の
みにて、藤氏の運命やうやく傾くや、文學も男子の手に移り
て作品著しく質實となりて近古時代に入れり。
此時代の文學を類別すること左の如し。

歌謠——和歌今様

散文——雜文學 物語

和歌今様

唐代文化の影響を受けて、弘仁¹⁴⁰¹⁻⁵⁵の頃には詩文の勅撰を見し
が、延喜¹⁴⁶¹⁻⁸²の聖代に和歌の復興するや、その株を奪ひて古今集
に二十一代勅撰の範を垂れぬ。

古今集は紀貫之・凡河内躬恒等の撰ずる所。用語と思想とよ
く調和して、穩秀流麗の妙を極む。之に後撰・拾遺を加へて三
¹⁵⁰⁵
¹⁶¹¹ ¹⁶⁰⁰年

古今集

紀貫之

代集といふ。

貫之は漢文の大家なる長谷雄の孫なり。和歌は世に許されけん、門閥既に成りし時に方りて、御書所預の微官を以て勅撰の命を拜して、和歌史上の一期を劃したり。

俊成と千載集

五位と薩摩守忠度

歌合

今様

既にいへる新古今の前に千載集あり。その選者は藤原俊成にて、所謂五條三位なり。抑三代集を以てかりに藤氏全盛を代表せんか。院政時代には全葉詞花集ありて、新奇を求むる餘りに、頗る古今以來の正風に遠ざかり。俊成この弊を矯めんとて、勉めて高雅にして平淡なるものを採りて、この集を成しぬ。又天徳の頃より歌合ありてその優劣を定めしかば、遂に和歌にも師授を要することゝなりて、技巧の詮義やかましくなりぬ。

今様とは新體の義なれども、特に七五言四節より成れるも

の、稱となれり。かの伊呂波歌もその一なり。此期の中葉以後盛に行はれ白拍子の舞には之を歌ひたりとぞ。

雜文學

雜文學には歌物語日記・雜史・隨筆等の別あり。

伊勢物語

歌物語とは歌を主として、その歌に關係ある事實を加へて、篇をなしたるものにて、伊勢物語・大和物語これなり。伊勢物語は在原の業平の初冠より終焉までを記して、傳記の體となせり。

三河より酸河へ

伊勢物語

三河の國八橋といふ所に到りぬ。其處を八橋といふことは、水の卿手に流れ分れて、木八つ渡せるによりてなん八橋とは云へる。その澤の邊に、木陰に下り居て、かれいひ食ひげり。その澤に杜若いと面白く咲きたり。それを

見て或人の曰はく「かきつばたといふ五文字を句の頭にすゑて、旅の意をよめ」といひければ、よめる

から衣きつ、馴れにし妻しあれば、遙々來ぬる旅をしぞ思ふ。

とよめりければ、皆人餉の上に涙落してほとびにけり。ゆきくゝて駿河の國に到りぬ。うつの山に至りて、わが入らんとする道はいと暗う細きに薦かづらは茂りて物心細く、すゝろなる目を見る事と思ふに、修行者あひたり。かゝる道にいかでかおはする」といふに、見れば見し人なりけり。京にそのもとにとて文かき附く。

駿河なるうつの山邊の現にも夢にも、人のあはぬなりけり。

日記にも紀行と日乗とあり。貫之の土佐日記は甲に屬す。國文未だ盛ならざりし世とて、憚る所やありけん、女の書ける風を装ひたり。紫式部日記は乙に屬す。式部の徳操はこの書によりて證せらる。

正月七日

土佐日記

七月になりぬ。同じ港にあり。今日は青馬を思へど甲斐なし。唯浪の白きぞ見ゆる。中略。今破子持たせて來たる人、その名などぞや今思ひ出でん。此人歌詠まんと思ふ心ありてなりけり。とかく云ひくゝてぞ浪の立つなること、憂ひいひて、詠める歌

行く先に立つ白波の聲よりも、後れて泣かん吾やまさらん。

とぞ詠める。いと大聲なるべし。持て來る物よりは歌は如何有らん。此歌をこれかれあはれがれども、一人も返しせず。しつべき人も交れ、ども、之をのみいたがり、物を飲み食ひて夜更けぬ。

大鏡と
榮花

今昔物
語

雜史に大鏡・榮花物語あり。ともに御堂關白の榮花を寫すを主とす。但し榮花は關白を理想化して、之を謳歌するに止まれども、大鏡は、是を是とし非を非とし、事實の真相を窮むる所に、作者の批評眼を見る。又今昔物語あり。和漢・天竺の雜談を集めたるものに過ぎざれども、その文章の簡朴なる、自ら近古時代の和漢混和文の萌せるを見る。

兄弟二人植萱草紫苑語

今昔物語

今昔△△の國△△の郡に住む人有けり。男子二人有けるが、其父失にければ、其の二人の子共戀ひ悲ふ事年を経れども忘る事無かりけり。中略而る間、漸く年月積て、此の子共公に仕へ、私を顧るに難堪き事共有ければ、兄が思ける様、我れ只にては思ひ可止き様なし。萱草と云ふ草こそ其れを見る人、思をば忘るなれ。然れば彼の萱草を墓の邊に植て見んと、思て植てけり。其の後、弟常に行て、例の御墓へや參り給と兄に問ければ、兄障がちにのみ成て、不具のみ成にけり。然れば弟、兄を糸心疎しと思て、我等二人して親を戀つるに懸りてこそ日を暗し、夜を曙しつれ。兄は既に思ひ忘れぬれども、我は更に親を戀る心不忘と思て、紫苑と云ふ草こそ其れを見る人、心に思ゆる事は不忘なれとて、紫苑を墓の邊に植て、常に行つ、見ければ、彌よ忘るることなかりけり。下略

枕草紙

隨筆は枕草子を唯一とす。その銳き眼にて觀察したる事物を、巧なる筆にて品評せる間に、清少納言が博學を自負せる

御身譽かた腹痛きまでなり。

すさまじきもの

枕草子

晝吠ゆる犬、春の網代、三四月の紅梅の衣兒の亡くなりたる産屋火おこさぬ火桶、すびつ、牛惡みたる牛飼、博士の打續き女子生ませたる方違に往きたるに響應せぬ所、節分はましてすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき、京のをも左こそ思ふらめ。されどそれはゆかしき事をも書き集め世にある事を聞けばよし、人のもとにわざと清げに書き立て、やりつる文の返事今はもて來ぬらむかし、怪しく遅きと待つほどに、ありつる文の結びたるも、たて文も、いときたなげに持なしふくだめて、上に引きたりつる墨さへ消えたるを、おはせざりけり。若は物忌とて取り入れずなどいひて、もて歸りたる、いとはびしくすさまじ。

漢詩漢文の盛

かく國文の盛になりしは、此時代の初に片假名平假名成りて、自在にわが國語を寫さるゝに至りしことを最大因とす。さればその未だ流布せざりし間は、漢詩漢文標準文學とし

變風氣の

て貴ばれ、續しよく日本紀にほんき以下の國史、家々の詩文集等續々として出でたりしに、小野篁1137菅原道眞1132に及びては、何れも漢文の大家ながら、なほその和歌の世に傳はるを見るなり。1512改 1504改

物語

竹取物語

物語の祖を竹取物語といふ。竹中より得たる赫哉かや姫ひめを主人公とし、多數の貴紳之を得んと競争せしが、その效なく、姫は月界に仙し去るといふ筋なり。

空穂物語

ついで空穂うつほ物語あり。其至孝に感じて、熊より讓られたる杉の空うらに成長せし仲忠が、貴宮ききうに對する失戀の悲を償ひて餘りある、その天稟てんべいの技藝美をたたへて篇を結べり。

落窪物語

落窪1130改物語之時を同じうせん。繼母に苦しめられて、落窪にうき月日を送れる姫君が、少將の目にとまりて家門の榮を

源氏物語

極め、繼母は却てその實子にさへも責めらるゝ物語なり。かくて大なる源氏物語出でたり。先、光源氏ひかりと紫上うへとを主人公として、善盡し美盡せる境遇を寫し、後には薰大將かかろと浮舟うきふねとを以て之に代へ、失敗破綻たん累りに至れる生活を以て、前に對照す。全篇五十四帖、脈絡毫も亂れず、人物活動し、文章穩麗なるは何たる才筆ぞや。

若紫の一節

「いとみじき花の陰に暫しばしも休らはず、立ち返り侍らんは飽かぬ業かな」と宣ふ。岩陰の苔の上に並居ならひて、かはらけ參る。落ち來る水の様ようなど故ある瀧のもととなり。頭中將懷なりける笛取り出で吹すましたり。辨はなの君扇あふはかなう打ならして、豊浦の寺の西なるやと謠ふ人よりは異なる君だちなるを、源氏の君いと痛いたう打惱みて、岩に倚り居給へる、類る無くゆゆ、しき御有様に、何事にも目移るまじかりける。例の筆簾吹く隨身、笙の笛持たせたるすきものなどあり。

僧都^{きん}琴を自ら持て参りて、是唯御手一つ遊ばして、同じくは山の鳥も驚し侍らんと切は聞え給へば、亂り心地いと堪へ難き物を聞え給へど、氣憎からず搔き鳴して、皆立ち給ひぬ、飽かず口惜しといふ甲斐なき法師童部も涙を落し合へり。まして内には、年老いたる尼君たちなど、まだ更にかゝる人の御有様を見ざりつれば、此世の物とも覺え給はずと聞え合へり。僧都もあはれ何の契にてかゝる御様ながらいとむづかしき日の本の末の世に生れ給ひつらんと見るに、いとなん悲しき。て目おし拭ひ給ふ。この若君幼心地にめでたき人かなと見給ひて、宮の御有様よりまさり給へるかななど宜ふ。さらばかの人の御子になりておはしませよと聞ゆれば、打うなづきて、いと善うありなんと思ほしたり。雖遊にも畫書い給ふにも、源氏の君と作りいで、清らなる衣著せかしづき給ふ。

奈良朝時代

概説

こゝに
いふ
奈良朝

政治史にて奈良朝といふ語は都の平城京に在りし八十年を指せども、今は大化新政より以後をいはんとす。
1302—1414

隋唐文明の輸入は政治上に、大化の新政を起して、新に郡縣の制を布かれ、八省百官備りて、文物粲然の世となりぬ。從つて都城の制も發達して、平城京を定めらるゝに至れり。

佛に倭
せし
時代

此時代は、上下を通じて佛に倭せし時代なれば、寺を興し佛を造り經を寫すにこれ日も足らず、之が爲に建築・彫刻の如き美術は非常に進歩したれど、文學はなほ之に副はぬ憾あり。さはれ宣命の文・萬葉の歌ともに質實雄大なること、却て平安朝の花やかなるのみなるには優れりといはる。

漢字の
利用

漢字は、此時代より、その義字たる外に、表音文字としても用ゐられて、平安朝に假名を起す徑路を示せり。
今便宜上記紀宣命・萬葉集として細説せん。

記紀宣命

記紀の
關係

記は古事記・紀は日本書紀の略なり。ともに開闢以來この時代の初までの歴史なり。古傳説の眞を傳へん爲に、記は種々の困難を犯して、國文に綴りしに、唐土崇拜の時好は之に満足せずして、紀の勅撰を見るに至れり。

宣命

宣命せんめいとは今の詔勅の類なり。その體極めて莊重なれども、中に君臣和合の情溢れて、祖宗樹徳の深厚なるを見る。又風土ふうど記あり。浦島太郎・天羽衣等の傳説は既にこの中にあり。

※ 汝等釀入鹽折之酒、且作廻垣於其垣作八門、每門結八佐受岐、每其佐受岐置酒船、船每盛其八鹽折酒而待。（記）

乃使脚摩乳手摩乳釀八醴酒并作假殿八間、各置一酒槽而盛酒以待之也。（紀）

萬葉集

古今と萬葉との相違は既にいひぬ。萬葉に雄大なる格調を起し、功は柿本人麿1330頃に歸せざるべからず。持統・文武の朝の人なり。やゝ後れて山邊赤人1360頃あり。好みて自然の景物を詠じ、各その特長を發揮して此集の雙壁たり。

赤人と同時に山上憶良1360頃あり。遣唐使の一行に加へられたるほどなれば、漢學の影響著しき歌人なり。大伴旅人・家持1370頃父子亦著名なり。その家武門の名族なるに、やうく藤原氏1410頃に壓

せられて政治上に意を得ざるより、祖訓を述べ兒孫を戒むるものには、國民性を代表する作多し。

過近江荒都時歌

柿本人麿

玉手次畝火之山乃樞原乃日知之御世從阿禮座師神之叢櫻木乃彌繼繼爾
天下所食乎天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越何方御念食可天離夷者雖有
石走淡海國乃樂浪乃大津宮爾天下所知食兼天皇之神之御言能大宮者此
間等難聞大殿者此間等雖云春草之茂生有霞立春日之霧流百磯城之大宮
處見者悲毛

樂浪之思賀之辛崎雖幸有大宮人之船麻知兼津

左散難彌乃志賀能大和多與抒六友昔人爾亦母相目八毛

望不盡山歌

山邊赤人

天地之分時從神左備而高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之
陰毛隱比照月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久曾雪者落家留語告
言繼將往不盡能高嶺者

田子の浦に打
出でて

田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪者零家留

見れば
白妙の
富士の
高根に
雪はふ
りつゝ
(百人一首)

上古時代

概説

神代の事悠遠にして知り難けれど、神武東征以前に若干の文明を有して、純粹なる國民性の既にそこに露れたる多し。神武元を大和の樞原に紀してより六百年、崇神・垂仁の朝鞆の下の時に變亂を見しが、景行に至りて熊襲東夷の征討あり、仲哀・應神に至りて三韓の降服あり、内憂既に絶えて外交亦大に振ふ。これより三韓の文物技藝のわが文明を進めしこと幾何ぞ。特に漢學の傳來はわが文學史上尤も重要な事實とす。但し漢學の思想は、其尊祖尙禮にして實際的なる

三韓の
文藝傳
來す

佛教我
に入る

その弘
布

に於て、大體固有の國民性と一致したり。
その後、允恭の朝には、姓氏を正さるゝあり、繼體以後三韓の
叛服常ならざりしが、欽明十三年百濟國より佛教を傳へぬ。
佛教は未來教にして、平等無差別をその教義とす。わが國民
性と一致せざる論を竝たず。たまゝ蘇我・物部二氏の軋轢
は、その採否の論と結合して、政治上の問題となりしが、物部
氏破れて佛教は蘇我氏の跋扈につれて廣まりぬ。時に聖德
太子あり、亦奉佛の念深く、奈良朝建寺造佛の例は此時に開
かれぬ。彼使を隋唐に遣し、こと亦此時よりなり。
上古には國字なく漢字の用廣からざれば、文學の發達も極
めて遅かりき。今傳説・祝詞・和歌として細説せん。

傳説

傳説に
あらは
れたる
國民性

天地開闢・天孫降臨の大より、因幡の兔・隱岐の鰐の小に至る
幾多の傳説は、かの記紀二書に採録せられて、建國の由來よ
り忠孝一致の國體を示せり。

大八洲の生成に皇室と國土との關係知られ、大國主の國讓
り、饒速日の歸順に皇室と臣民との關係知られ、禮節作法の
考は天の御柱の言舉直しに、清淨潔白の好は檍原の禊祓に
著く、皇弟の暴行を怒り給はぬ大神の仁恕、天石屋戸の前常
夜の闇を物とせず、天宇受賣命の戲樂に高天原どよみ笑ひ
し樂天に至りては、誰か我國民性の淵源の深きを信ぜざら
ん。木花開耶姬の談また草木を愛する面影を現すものたり。

祝詞

三種の神器儼として存して、天皇は現在にまします大神な

大神と
天皇祭と
政

祝詞の
思想

り、大神は過去にましく、し天皇なり。その過去にましく、
し天皇に仕ふるを祭といひ、現在にまします大神のこと向
け給ふを政といふ。知るべし、上古は祭政一致の世なるを。こ
の天皇即ち大神なりとは國民一般の思想なるを以て、國家
皇室の大事に際して神前に白し、祝詞亦個人の思想にあ
らず。然るに祝詞の思想には、氣宇宙を呑みたる進取的のも
のと、風旱水の害を攘はんことを願ふものとの二ありて、久
しく口々に傳はりしが、延喜中始めて記録せられて今に存
せり。

祈年祭

皇神能見霧志坐四方國者天能壁立極國能退立限青雲能靄極白雲能墜坐
向伏限青海原者棹柁不干舟艫能至留極大海原爾舟滿都々氣氏自陸往道
者荷緒縛堅氏磐根木根履佐久彌氏馬爪至留限長道無間久立都々氣氏狹

國者廣久峻國者平久遠國者八十綱打掛氏引寄如事皇太御神能寄奉
荷前者皇太御神能大前爾如横山打積置氏(下略)

和歌

長短歌の別未だ明らかならず、一句の語數亦定まらざれど、
長短句を隔用する傾は已にあり。その修辭としては疊句・對
句或は枕詞盛に用ひられ、譬喩法は頗る進歩せるを見る。而
して詠ずる所は概ね抒情詩にして、その情感亦極めて率直
朴野なり。蓋し溫和なる氣候明媚なる山水の間に生息せし
わが國民には、深刻なる内省・雄大なる想像は萌すを得ざり
しか。

神武天皇御製

於佐箇能於朋務露夜珥比苦瑳破而異離島利苦毛比苦瑳破而枳伊里島利
忍阪大室屋人入居

苦毛ミ瀬セ都ツ瀬セ都ツ志シ俱ク梅メ能ノ固コ餓ガ勾コ鶯ウ都ツ々々伊イ異イ志シ都ツ々々伊イ毛モ智チ于ウ智チ豆シ之シ夜ヤ蘇ソ務フ
瑞弘ク計ケ王ワ
稻伊イ儼ナ武ム斯シ盧ロ智カ簀ハ訴ツ比ヒ野ヤ儼ナ擬ギ寐ミ逗ツ愈ユ凱ケ婆バ儼ナ弭ミ企キ於オ已イ陀タ智チ曾ソ能ノ泥ネ播ハ宇ウ世セ儒ズ
藤河カ添ソ柳ユ水スイ行コウ鹿ロク起キ立タテ其キ根ネ來ライ朱シュ

新體國文學史教本終

附錄

不二山を詠める長歌及其の反歌

そがひ 背面 背面に云々狭きか
 もふり放け云々低きかも對句
 横なる 横たはる 駿河の海二句
 上に應ず

常夏に 常しなへに

鬼念佛圖贊

蝸牛蠻觸の爭「莊子に有國リ於蝸之
 左角者曰觸氏有國於蝸之右角者
 曰蠻氏時相與爭地而戰とあり」
 外面云々「華嚴經に女人ノ地獄ニ使能、
 斷佛種子外面如菩薩内心如夜叉
 とあり」

奉加帳 神佛へ寄進の中に加へ奉

るその額を記す帳 つくは帳に
 附くと鐘を撞くとを兼ね

なまいだ 南無阿彌陀佛の音の略

出世景清 門左衛門が義太夫の爲

に新淨瑠璃を作る始なれば出世の
 二字を冠したりといふ景清が平家
 の爲に頼朝を撃たんと東大寺の大
 佛供養に身を寢して入込みたるに
 畠山重忠に見顯されて牢舎の身と
 なり遂に頼朝の大度に感じて歸服
 するに至るを一篇の趣向とす
 色代す 敬禮す
 平家は云々 ともに屋島に在り

室山 二年十一月

水島 同間十月この二戦は平氏の敗にあらず

鴨越 三年二月

餘すまじ 遁さじ

さもしや 鄙劣なり

案のうち物 案の内勝算ありと打物鑄物に對して長刀、刀槍などを兼ね

三保谷 三保谷十郎國俊

心に任せぬ人心 人心は一時の感情 心には良心の判斷

諫むる 戒慎す

鹽井川

東海道中膝栗毛の一節
この川は遠江國にあり

おぶさつて 負ひて

言語道斷 云はうやうなし

われ一人 名取川は仙臺にあり此は頼朝奥州征伐の時に詠めるなれば此地を用ふ

かち渡り 徒と勝とを兼ね

雪ながら 第一句霞第二句梅第三句柳みな春の景物なり

月 第四句月第五句秋みな秋の景物なり

景清

次第名乗道行地 みな謠曲の術語

なり、次第とは曲の主なる者が始めて舞臺に入る時に謠ふ文句名乗はその身分をあらはす語道行

は景物によせて地名を出してそこを經過せし意を示す文章なり

又地とは曲の主なるものならで謠ひ手ありて引き受け謠ふ部分なり

消えぬ 風の便に父の露の身は未だ消えずと聞けど今は果していかに成りつらんと云ひて父を訪ふ意を示す

人丸 景清が尾張熱田にて遊女と相馴れて設けたる女子なる由曲中にあり

涙片敷く 片敷くは衣の片袖を敷く意にて偶^{つれ}なくて寝るに云ふ、こは思ひねの涙が床に浸みたる

それを敷きて寝るなり

とほとふみ 行方を問ふといひかけたり

雲井 八橋に蜘蛛といふこと本文伊勢物語の例を見よ、それにかけたり

彼者を 景清は己の薄命を耻ぢて此子に會ふを嫌ふ故この語あり

いで其頃 出世景清と對照せよ

逃がさじと 追ひかけてと語を足して見るべし

とてもいく程 迎も幾程の命か有らん此つらき生活にては行末も近く迫れり

盲目の 謠曲にては景清は始より

三河より

蜘蛛 八方へ打違へに

かれいひ 乾飯かんはんにて旅行に携ふる

飯、後に、ほとびにけりとあり

句の頭 毎句の第一字、この體を折

句といふ

から衣 著るの枕詞、同音なるより

來にも用ふ

すゞろなる目 思の外なる目

修行者 道者

その人 意中の人、こゝはその妻か、

惟喬親王かならん

人のあはぬ あなたの思が足らぬ

やら夢にも見ぬと恨むなり當時

の思想にては甲が乙を思へば乙

盲目なり(淨瑠璃にてはいかに)暗
き所の燈火の如く惡しき道の橋
の如く跡弔はれんを頼みにする
の意その暗きに盲目のと自分を
あらはせり

とまる(景清)行くぞ(人丸)

どぶかつちり

鹽井川と對照せよ

勾當

盲官に―座頭などあり俗に

盲人を座頭といふもこれより起

る

ことぢやが參らうといふ―の當

時の語法

おぢやれ 來れ

瀬踏 淺瀬の探險

ぢやまてい 感嘆詞

の夢に甲が見ゆと考へたり

正月七日

同じ港 土佐國大湊

青馬

―節會せちかいとして此日京都にあ

りし行事なり

白波の聲 船旅する人にこの語を

贈れるがさし合あひなり

これなのみ これは歌をさすいた

がりは物を譽むる様にてそしる

意

兄弟二人

私を顧るに 家事を問ふ違なき事

ども

只にては 何か方法を講せずして

は

不具 偕に往かず

懸りて 親を戀ふることにかゝづ

らひて

すさまじきもの 興醒むるもの

網代 冬日―に―へて魚を捕ふる

具

紅梅の衣 表紅裏紫十一月より二

月までに着るべきなり

博士の 學者の家男子を望む急也

方違 今東に赴かんとするに太白

神などの塞ふさにあたれば姑く南に

赴きてそれより左して東に向ふ

をいふ

節分 立春の前日、この日の方違な

り

人の國 地方(京)に對して

むすび文 書狀を卷きてその端を

折り結びたるもの

豎文 鳥の子、薄様などの全紙を用

ゐたる書狀

ふくだめて 揉みくしやにす上に

引きたりふる墨 封し目にひき

たる墨なり

物忌 太白山などを避けて家に籠

りて慎み居ること

若紫の一節

光源氏が瘡を病みて
加持を頼まんとて北山に赴かれて

紫上が(この時十歳ばかり)祖母の許

に在るをかいまみられしがこの文

は京よりの迎人とともに歸路につ

かるゝ所なり

かはらけ 杯

頭中將 葵上の兄弟にて光源氏の

親友なり

扇打鳴らして 拍子を取る

豊浦の寺 催馬樂ひまがくに入れる歌にて

當時酒宴には催馬樂を謠ふこと

流行せり

人よりは 中將も辨の君も——云

々なり下の「目移るまじかり」にて

源氏に對しては一向に見離され

ぬことゝなる

打惱みて 瘡の後

ゆゝしき御有様 立派すぎる程

僧都 紫上の祖母の兄弟

御手一つ 一曲弾じて

内には「いみじき花の陰に對す

いとむつかしき むさくろしき

若君 卽紫上

宮 父宮にて式部卿宮といふ

さらば 尼方の女房の若君に戯れ

いふなり

記

八鹽折之酒 八回醸し返したる醇

酒

もとほし まはす

さずき 今の棧敷

汝等 素盞鳴尊が櫛稻田姫の親な

る脚摩孔手摩孔を呼びかけ給ふ

なり此は八俣大蛇を待ち受くる

準備の一なり

紀 記の文章と比較すべし

過近江荒都時歌

玉手次 玉は美稱「たすきは」は襟にて

畝の枕詞

御世從 御世よりにて神武以來

阿禮座師 生れ給ひし

知しめしゝを 此を感嘆詞にてこ

こ迄神武以來の例を述ぶ

なら山 大和國添上郡

御言の 尊みことなりたゞ音による

茂く生ひたる 此二句疑の意に見

る

大和多 曲うたにて水の廻流する所故

に淀むとつゝく

望不盡山歌

眞淵のと對照せよ

いゆき 往きなりいは接頭語

時じくぞ 時ならず常に

祈年祭

二月四日に行はれ歳災作

らず風雨順應ならんことを祈る今

も神宮 奉幣二月十七日にあ

り

見霽す 見晴らす

壁立つ 遠く天際を見れば壁の立

てる如き様なるをいふ

墜り居向伏す 雲の下りて伏す如

きなり此四句は天地の限りの意

荷緒 緒を以て馬に載せ著くる荷

さくみて 蹈み分く 青海原云々

は海路より奉貢するもの自陸云

八

云は陸路より租調を奉納するもの

立つて 直に上の荷前といふ

語にかゝる

寄しまつり給ふ 歴代の天皇に任

せ給ふ

荷前 諸國にて出来る調の初物

神武天皇御製

忍阪 大和國城上郡

久米の子 大來目部をさす此時道

臣命の率ゐ給ふ所 命はかの大

伴氏の祖なり

頭槌い 頭槌も石槌も道臣命の佩

ける劍の名 いは歌の調にてつ

ついと延べていへるものかとい

ふ説あり

弘計王

稻庭 河の枕詞ならん

靡き起き立ち 此歌皇統なること

を柳に世の浮沈を水に喩へたる

なれば河添柳の水高き時は暫く

その水にひたる如く我等も世路

の艱難にあひては一時民間に沈

淪すとも水行きて干る時は柳の

水面に起き立つ如く我等も皇胤

は失ひ果てずとなり

其根 柳の根なり 億計弘計二王

丹波の縮見に隠れまし、時その

皇胤なることをほのめかさる、

歌なり此事によりて遂に清寧帝

の統を繼がるに至るなり

232
427

著作
所有

明治四十二年十一月十二日印刷
明治四十二年十一月十五日發行

著者 岡井慎吾
發行者 岩田僊太郎
印刷所 株式會社 東京築地活版製造所
發賣所 振替貯金口座第二八〇九番
目録 振替貯金口座第二八〇九番

新體國文學史教本
定價金四拾錢

4221.8

紀元元年	上	和歌	祝詞	傳説
32.5	古	1304	宣命	記紀
紀元1304	奈良朝時代	140	雜文學	物語
紀元1444延暦二	平安朝時代	400	雜文學	御伽草子
紀元1844元暦元	近古時代	415	雜文學	小説
紀元2259慶長四	徳川時代	268	雜文學	小説
紀元2529慶應三	明治時代	43	新體詩	小説
紀元2570明治四十三				

